opusdei.org

オプス·デイ属人区長 の家庭に関する手紙

2006年を始めるに当たり、ハビエル・エチェバリーア司教はオプス・デイ属人区の信者と協力者に宛てて手紙を届けました。その中から、家庭を護り強める必要性を説いた個所を以下に紹介します。

2006/02/03

降誕節の間、私たちの目は特に聖家 族の上に注がれます。この「地上の 三位一体」を観想すると、感謝と礼 拝をするのは当然ですが、次のような願いも心に湧き起こります。いたなる所においても家庭の真の本性に、尊厳が尊重され守られますようにとなりますようにもった。といる12月30日、聖家族の祝日の典と通して祈るよう促されました。「恵み豊かな父よ、あなたは、聖家族を模範として与えてくださいました。を模範として与えてくださいまり

族を模範として与えてくださいました。わたしたちが聖家族にならい、愛のきずなに結ばれて、あなたの家の永遠の喜びにあずかることができますように」(ローマミサ典文、聖家族の祝日の集会祈願)。

教皇ヨハネ・パウロ二世は、その生涯 の終わり近く、このことに関する最 後の公式発言でこう述べられまし た。「人となられ、人間の家族の一 員となられた神の神秘を観想するこ とによって、家庭の価値と美しさが 完全に理解できるでしょう。家庭は キリスト信者の生活の中心にあるだ けでなく、社会と市民生活の基礎であり、それゆえにキリスト教的社会 教説の中心をなすものなのです」

(教皇ヨハネ・パウロ二世、2004年 12月18日、家族協会総会への参加者 への演説)。

家庭は単なる人間的な制度にすぎ ず、時の経過と共に独善的な変更を 加えることが許されると考える人た ちに対して、ベネディクト十六世も また、神の摂理の中における夫婦と 家庭の意味を深く理解することの重 要性を訴えられ、次のように言われ ました。「結婚と家庭は、社会が偶 然作り出したものでもなければ、特 殊な歴史的・経済的状況の結果生まれ たものでもありません。反対に、男 性と女性の正しい関係に関する問い は、人間存在の深い本質に根ざし、 この本質においてのみ、答えを見い だしうるものです。この問いは、古 くから、また今も、人間が自分自身 に発し続けている、『わたしは何者

か』という問いと切り離すことができません。そして、この『わたしは何者か』という問いは、神についての次のような問いと切り離すことができないものです。『神は存在するか』。『神とはどういうかたか』。『神のみ顔は実際にいかなるものか』」(ベネディクト十六世、2005年6月6日、ローマ教区大会開会演説)。

教皇様はこの問いかけをするに際して、聖書の基本的な言葉を思い出た。「人間は神の像にかたれました。そしての創造されました。その愛へのです。だから、この愛へのとしてが、人間を真の意味で神の像ととにが、人間は、誰かを愛することです。人間は、ものです。愛は利己主義の対極にあるものです。

聖ホセマリアは私たちに次のように 繰り返していました。「私たちの信 仰は地上の全ての美・寛大さ・真の 人間性を無視しないことがわかりま す。生活の目的は、ただ単に自己の 利益や喜びだけを求めることではな く、犠牲と自己放棄による真の愛を 求めることにあります。私があなた たちを愛するのと同じように、あな たたちも真実と行いをもって神と 人々を愛しなさい、と主は招いてお られるのです」(聖ホセマリア『知 識の香』24番)。このような確信を 持ち、それを毎日自分の振る舞いで 表わし、家庭、仕事場などにおいて 実行するならば、その時、神の助け を受けて、誤った考え方を効果的に 打ち破り、そのような意見を支持す る人たちを神のもとに連れ戻すこと ができるでしょう。

愛に関するこの原初からの召し出しから直接に導かれる結論のひとつは、自分自身を独占的に所有している人は誰もいない、ということです。すべての人は、その起源とその

目的を神から受け取り、その絆の中 に織りこまれています。したがっ て、各自が置かれている状況に応じ て、社会の善に対する個人的な責任 を受け取るよう皆が呼ばれているの です。家庭と夫婦に関する法律は、 教会においても、共通善を求めるい かなる社会においても、単に外的に 付加された形式的なものではなく、 「婚姻の愛の契約を結ぶために、本 来、どうしても必要とされるものな のです。これに対して、同棲、『試 験結婚』、さらに同性の人同士で行 う疑似的結婚のような、現在のさま ざまな堕落した結婚の形態は、無秩 序な自由の表現であり、こうした自 由は、人間の本来の意味での解放を 歪んだ形で示すものです。こうした 疑似結婚は、からだの価値の矮小化 に基づくものです。こうしたからだ の価値の矮小化は、必ず人間の価値 の矮小化を伴います。このような疑 似結婚を行う前提となっているの は、人間は自分を好きなようにでき

るという考えです。だから、自分の からだは、人間的な観点から、二義的 なように利用できるような、二義的 なもののとなります。道徳的見しな を発見した。 がらだとその価値を発見した からだをがられています。 には、それは、からだを蔑視した には、それば、格の本来のありた らだをいわば人格の本来なのです」 (ベネディクト十六世、2005年6月6 日、ローマ教区大会開会演説)。

 面は、私たち自身が眠り込むことのないよう、さらには悪夢に陥っている人々を夢から覚めさせるように促します。

私たちのパドレがとても高く評価さ れていた大人数の家族について特に 触れずにはいられません。「私は大 家族の友ですが、同時に子供の数が 少ない家族や子供がいない家族の友 でもあります。神様がそう望まれた のですから。たとえ神様が一人しか 子供を恵まれなくても、その子を神 様に捧げる寛大さを持っている夫婦 を見てきましたが、そうできる夫婦 はそう多くははありません。子沢山 の大家族は、神からの召し出しの偉 大さや、各々の子供にそれぞれの道 があることをもう少し簡単に理解で きます。また同時に、模範的な夫婦 でありながらも神様が大家族になる 恵みを送られない人たちが、その聖 なる神の摂理を喜んで受け入れ、隣 人愛に多くの時間を割く姿を見るこ

ともできました」(聖ホセマリア、 『OBRAS』,1963.X号20-21p.)。

私たちのパドレと同じく、皆さん方 と共に私も、神が子供を与えられな い夫婦に対して心からの愛情を送り ます。創立者が言われていたことが 実現する姿を何度も目にしてきまし た。すなわち、そのような家族が 「自分の家庭を聖化できるだけでな く、他の家庭の子供たちのために もっと時間を割くことができるし、 すでに献身的にそれを実行している 人たちが大勢いて | (聖ホセマリア、 1969年4月10日の団欒のメモ)、実り 多き父性と母性を発揮しているから です。多くの人がこのような「父親、 母親」の寛大な行いの結果としてオ プス・デイの信者になったことを、私 はとても嬉しく思います。

つい最近、教皇ベネディクト十六世 は次のように述べられました。「現 代社会において、多くの子供を持つ 家庭は信仰と勇気と楽観主義の証人 です。子供がいないところに未来は 存在しないからです。国全体の冨で あり希望である大人数の家族を守り 支えるために、新たに適切な社会的 かつ法的なサポートがなされるよう 後押しをしたいと思います」(ベネ ディクト十六世、2005年11月2日の 謁見の結びの言葉)。教皇のこの言葉 が、あらゆる場所において、社会の 未来にとって必要不可欠な超自然的 かつ人間的な任務を家庭が果たして いくことができるよう、助けを与え る努力を続ける推進力となるよう 願っています。

ご降誕の神秘の黙想に戻ります。それは毎日祭壇上に来られるイエス・キリストによって繰り返されるものであり、恩寵によって私たちの心中で生まれ続けるものでもあります。光を求め、主から学ぶために、「聖櫃という永久の馬小屋」(聖ホセマリア、1939年1月の言葉。

『道』、マドリード、リアルプ社 2004年発行のペドロ・ロドリゲスに よる注釈版、第3版、1051ページの 引用)をたびたび訪れましょう。

†ハビエル

ローマ、2006年1月1日

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/

opusu-deishu-ren-qu-chang-nojia-tingniguan-surushou-zhi/ (2025/11/20)